



狂犬病について



狂犬病はすべての哺乳類が感染するウイルス疾患です。ヒトも動物も感染・発症するとほぼ100%死亡する恐ろしい感染症です。アジアでは年間3万人以上が死亡するといわれています。

現在、日本での感染は見られませんが、海外旅行先で感染し、帰国後死亡した例がみられたこと、犬の輸入や転居による海外からの犬の移動が頻繁にみられることから、現在では日本は完全な安全地域とはいえません。

狂犬病はどうやって感染する？

狂犬病に感染している犬の唾液中には狂犬病ウイルスが含まれています。この犬にかまれると、傷口からウイルスが侵入し、感染します。

狂犬病はどんな病気ですか？

犬の場合、興奮して攻撃的になり、かみつきます。また、体が麻痺し、食物や水が飲み込めなくなります。次第に麻痺が全身に広がり、呼吸障害等で死亡します。



狂犬病を治す方法はないの？

狂犬病を発症した場合、現在のところ有効な治療方法はありません。

ヒトでは感染犬にかまれた場合、速やかにワクチンを数回接種することで発症を抑えられることもあります。

では狂犬病にならないためにはどうしたらいいの？

狂犬病ワクチンを接種しておくことで、もしもウイルスが体内に侵入した場合、体内の免疫作用によって速やかにウイルスを攻撃するため、感染や発症を防ぐことができます。

ヒトの場合では、海外旅行先でむやみに野生動物や犬を触らないことが最も重要です。



すべての哺乳類が感染するのに、 なぜ犬だけ狂犬病ワクチンを打たなければいけないの？

狂犬病ウイルスは自然界ではコウモリが感染源だといわれており、北米ではアライグマなどの野生動物も人に感染させる危険性の高い動物だとされています。一方、アジアなどほとんどの地域では、人間の生活に身近な犬がヒトへの主な感染源であるため、犬への狂犬病ワクチン接種が最も重要とされています。

このように狂犬病はヒトも感染する人畜共通感染症であるため、公衆衛生の観点から犬への狂犬病ワクチン接種が求められています。

犬への狂犬病ワクチン接種はいつ必要？

日本では生後91日以降の犬を飼う場合、飼い主さんの居住地へ犬を登録し、犬鑑札の交付を受けること、狂犬病ワクチンを接種して注射済票の交付を受けることが法律(狂犬病予防法)で義務付けられています。また、それ以降、年1回の狂犬病ワクチン接種が定められています。

なお、毎年4月～6月が狂犬病予防注射月間とされており、登録済みの犬に対しては各自治体から集合注射の案内ハガキが送付されます。

狂犬病ワクチンを接種したあとはどうしたらいい？

狂犬病予防注射済証(証明書)をお渡ししますので、各自治体の市役所・区役所等にて手続きをしてください。初回手続きでは犬の登録と予防注射済票交付の申請が、次年度以降は予防注射済票交付の申請が必要となります。

当院では佐倉市在住の方のみ、毎年4～6月に市役所への手続きの代行を行っています(郵送料別途)。



狂犬病ワクチン接種の証明書が必要とされる場合がありますか？

飼い主さんの義務として、狂犬病ワクチン接種は公の場で必要とされます。

ペットホテル、トリミング、ドッグラン、ドッグカフェや飼い主さんとの旅行先で宿泊する場合などに証明書や注射済票の提示が求められる場合があります。

また、海外渡航する場合はその他予防処置とともに、証明書の提出が求められます。

